

自己浮上型海底地震計（OBS）と陸上地震観測網の併合処理による駿河湾周辺の地震活動観測

Integrated monitoring of seismicity in and around the Suruga Bay using Ocean Bottom Seismometers and inland stations.

*パナヨトプロス ヤニス¹、馬場 久紀²、西宮 隆仁³、曾谷 太洋⁴、中尾 凧佐⁴

*Yannis Panayotopoulos¹, Hisatoshi Baba², Takahito Nishimiya³, Taiyo Sotani⁴, Nakao Nagisa⁴

1. 地震予知総合研究振興会、2. 東海大学海洋学部海洋地球科学、3. 気象庁気象研究所、4. 東海大学

1. Association for the Development of Earthquake Prediction, 2. Department of Marine and Earth Science, Tokai University, 3. Meteorological Research Institute, Japan Meteorological Agency, 4. Tokai University

伊豆半島の西側、駿河湾の中央部を南北にのびる駿河トラフは東海地震の想定震源域とされている（例：石橋、1981）。さらに、この地域の北方に分布する富士川河口断層帯はフィリピン海プレートと日本弧付加体の陸上境界と考えられている（例：山崎、1992）。

2009年8月「静岡沖の地震（M6.5）」と2011年8月「駿河湾南西部の地震（M6.2）」の発生を契機に、東海大と気象研（MRI）は駿河湾石花海（せのうみ）周辺海域で、自己浮上型海底地震計（OBS）を用いた海底地震観測を開始した（例えば、馬場ほか、2015）。さらに2018年からは東海大と気象研（MRI）の観測点4点に地震予知総合研究振興会（ADEP）2点を追加し、駿河湾内で発生する詳細な地震活動に関する調査を継続中である。

本研究では、上述の2009年と2011年に発生した地震の余震活動と思われる駿河湾内に発生している群発地震活動について、OBS観測網と陸上基盤観測網のデータを併合処理した結果について報告する。

キーワード：駿河湾、群発地震、地震活動

Keywords: Suruga bay, Earthquake cluster, Seismicity